



日本消化器癌発生学会

# News Letter

<http://plaza.umin.ac.jp/~jsgc/>

2007 No.1

## 第18回日本消化器癌発生学会準備報告

第18回日本消化器癌発生学会学術集会を平成19年11月8日(木)と9日(金)の2日間に渡って札幌市・札幌厚生年金会館で開催させていただきます。

11月の札幌においては、近隣の山々には冠雪を仰ぎ、本州・四国・九州では経験できぬしゃきつとした朝・夕の冷え込みが身をひき締めさせてくれます。

今回は、「“ステップを踏んだ” 消化器癌制御を重視する研究と臨床の最前線」の意を込めて、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップを総計12種類組み立てております (<http://plaza.umin.ac.jp/~jsgc/>)。

癌を制御しうるためのbreak-throughを一朝一夕にして図ることの困難さは実感しているところではありますが、世界の癌研究・癌治療の歴史を振り返るとその壁の高さをあらためて知らされるものであります。今回は臓器・組織別の癌腫研究の相互の情報交換と討論の場として設定し、少しでも先端研究の発想を会員へ供与していただき、そして実効ある研究実践のための新たな展開を図る機会とすべく学術集会のプログラムを計画するところです。併せて、基礎と臨床のそれぞれの視点から活力ある討論の場ともしたいと願っています。分子生物学、病理形態学、疫学、病態生理学、臨床医学などの視点から核心をついた論議をしていただき、“若い研究者の明日に希望を提供”して下されば幸いです。私自身は、胆道・膵の悪性腫瘍の外科治療・基礎研究を望んでいましたが、何度も厚い壁が立ちはだき、他の研究テーマである感染・生体制御に関する課題に比重が移行しかねぬ状況にあります。胆道癌細胞・膵癌細胞はいずれも他の癌腫の細胞とは異なる細胞生物学的特徴を有し、それが根治性を損ねる高リスク局所因子となって存在していることは、多くの研究から示唆されます。ところが、それらの基本的知見が必ずしも癌制御に結びつけられていないのが現状です。特徴としての本質がそこにあることに疑う余地はないのですが。

さて、皆様には時間的余裕はほとんどおありでないのでしょうか、北海道の冬特有の海産物を中心とするお刺身やお鍋料理とともに酒を酌み交わすというような、楽しみを味わうことのできる時期でもあります。学術集会を終えた後の週末の休日に札幌の外へ足を転じていただければ、市内では経験できぬ真の自然の冬の壮大さを知っていただけるはず。生命を守る研究に携わって

いただいている先生方の心に、何か大切なことを再確認していただけるのではないかと確信いたしております。

まずは会場内で、暖房に頼らない熱い討論を重ねていただけることを期待いたします。

多数の皆様のご来札をお待ちいたしております。



第18回日本消化器癌発生学会  
会長 平田公一先生  
(札幌医科大学第一外科)



## 目次

第18回日本消化器癌発生学会準備報告	1
第17回消化器癌発生学会総会報告	2
G-Project委員会報告	3
日本消化器癌発生学会 学会賞規定	4
Oncologyについて	4
議事録	5
役員・評議員名簿	6
編集後記	8

## 第17回 消化器癌発生学会総会報告

第17回日本消化器癌発生学会総会は、愛知県がんセンター研究所副所長の立松正衛が会長となり、平成18年9月14日（木）、15日（金）の2日間、愛知県がんセンター国際交流センターで開催させていただきました。プログラムは特別講演、レクチャー3題、シンポジウム2題、ワークショップ10題から構成され、主題として、「胃型胃がん腸型胃がん」、「炎症とがん」の2つのテーマを柱に幅広い研究成果が発表され活発な討論が展開されました。

特別公演では、「消化器の発生における遺伝子ネットワークの解明をめざして」をテーマに首都大学東京の八杉貞雄先生に講演していただきました。主題の胃型胃がん・腸型胃がんの根源に関わる内容で、消化器癌発生学会の原点に帰る意味でも特筆される講演でした。

レクチャーは新しい試みで、話題となっている分野や今後注目されそうな分野の第一人者に総括的に話題を提供していただきました。ピロリ菌をアタックする粘液の存在を明確に証明した信州大学中山 淳先生の「ピロリ菌感染胃粘膜におけるⅢ型粘液の役割」、胃がんの遺伝子発現に世界に冠たる膨大なデータを集積されている広島大学分子病理の安井 弥先生の「胃癌のトランスクリプトームダイセクションー探索と展開ー」、ならびに低酸素抵抗性のがん細胞が悪性度に関係していることの重要性を提唱された国立がんセンターの江角浩安先生の

「乏血管性腫瘍の特質としての癌の悪性化」の講演は、いずれも多く参加者から好評をいただきました。

シンポジウムの「胃型胃癌、腸型胃癌」と「消化器がんの発生と抑制ー動物モデルからー」では、がん細胞の分化能から遺伝子改変動物を用いた機構解析まで、将来の分子標的治療へ向けての架け橋になる討論がなされました。そして、ワークショップでは「消化器がんの転移克服に向けて」や「消化器がんの新しい薬物療法へ向けて」等10題で、より治療につながるテーマで実内容的な内容が発表・討論されました。

総会の案内のポスターとプログラムの表紙の写真に古生代デボン紀の三葉虫をあしらい、古生物学会の案内かと思われた先生もおみえでしたが、化石にはそのまま止まってしまったという「負」の意味と、何億年にもわたり真実を不変で伝える「正」の意味があります。今回の学会での情報は、真実を何時までも参加者の方々にお伝えできたと信じております。会の運営には至らない点が多々あつたとは思いますが、ご容赦いただければ幸いです。皆様の今後のご研究の進展とご活躍を、そして学会のさらなる発展を祈念し、ここにお礼の学会報告のご挨拶とさせていただきます。

第17回消化器癌発生学会事務局  
愛知県がんセンター研究所 立松 正衛

**中外製薬**  
CHUGAI

Roche ロシュグループ

at the Front Line  
CHUGAI ONCOLOGY

**5-HT<sub>3</sub>受容体拮抗型制吐剤**  
劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品<sup>注</sup>

**カイトリル**<sup>®</sup>  
**KYTRIL**<sup>®</sup> 塩酸グラニセトロン製剤

注）注意—医師等の処方せんにより使用すること  
® F.ホフマン・ラ・ロシュ社(スイス)登録商標

**薬価基準収載**

注 1mg・3mg  
点滴静注用 3mg バッグ  
錠 1mg・2mg 細粒 0.4g

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意、用法・用量に関連する使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。

<http://www.chugai-pharm.co.jp>

〔資料請求先〕  
製造販売元 **中外製薬株式会社**  
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1

2006年9月作成

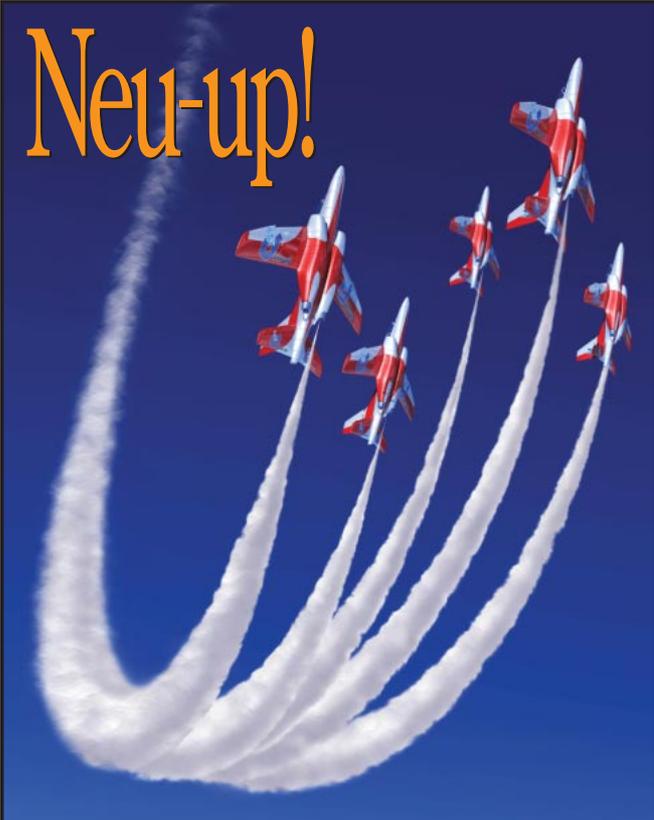
## G-Project 委員会報告

大阪市立大学大学院腫瘍外科  
平川 弘聖

日本消化器癌発生学会では、数年前より G-Project 委員会を発足し、TNM 分類や本邦ステージ分類に加えて、癌の分子生物学的特性に基づく予後予測因子として G 分類（遺伝子解析結果に基づいた悪性度マーカーによる Molecular Staging）の確立をめざしておりますが、その進捗状況を報告させていただきます。

平成 18 年の第 17 回日本消化器癌発生学会総会においても G-Project 委員会報告を行いました。まず G 分類選定に際して、過去 15 年間で予後因子解析がされた約 1,400 の論文報告の検証を行いました。その結果、胃癌では約 50 因子、大腸癌では約 30 因子の解析が行われており、その因子は多岐にわたり、またその他臓器でもさらに多数の異なる因子が検討されており、現時点では臓器横断的な統一因子の選定は困難であると考えられました。そこで、まず本邦でも症例数の多い胃癌・大腸癌において、独立した予後因子として報告の多かった p53、VEGF-A、C をシミュレーション因子として選定し、普

及性、簡便性を考え免疫組織染色による蛋白発現を病理医の先生にブラインドで検討して頂き、これまでのエビデンスの追試、検証を行うこととしました。この検討は本 Project のスタートとして行うものであり、G-Project 委員の先生の所属施設より切除標本のご提供を頂き、同じステージでも予後に差の見られる Stage II、III にしぼり、予後の判明している再発・無再発のおの 100 症例を対象とした case control study で、p53、VEGF-A、VEGF-C の 3 項目の発現有無と予後との関連を解析し、G 分類としての可能性の検証を開始する予定です。もちろん、この検証は本 G-Project の最初のステップであり、この結果のみで G 分類を決定するものではなく、これら 3 因子が候補因子として有用であるかを検討するとともに、今後さらに胃・大腸以外の臓器も含め、その他の G 分類候補因子をいくつか選び、同様の検証を進めたいと思います。そして、その結果を基に本学会から提唱する TNM-G 分類による新しいがん治療体系の確立に向けて、本委員会を中心に検討をさらに進めて参りたいと考えます。今後、会員の皆様にもご協力頂くこともあるかと思いますが、何卒宜しくお願い致します。





**遺伝子組換えヒトG-CSF誘導体制剤**  
指定医薬品/処方せん医薬品\* (薬価基準収載)

**ノイアップ® 注** 25 100  
50 250

Neu-up® for Injection 注射用ナルトグラステム(遺伝子組換え)  
25µg/V、50µg/V、100µg/V、250µg/V

\*注意-医師等の処方せんにより使用すること

■「禁忌」、「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意」等は製品添付文書をご参照ください。

製造販売元 [資料請求先]  
**協和発酵工業株式会社**  
東京都千代田区大手町1-6-1  
<http://iyaku.kyowa.co.jp/>

**KYOWA**

## 日本消化器癌発生学会 学会賞規定

本学会会員のうち、45歳以下の優れた研究業績を有する研究者で、消化器癌発生・進展・治療および予防に関する研究の発展を期待し得る本学会総会での発表に対し、その筆頭著者を表彰する。(最優秀賞1名、奨励賞2名)。

### 1. 目的

本学会は、消化器癌発生領域の学術および研究・教育の発展に寄与するため、研究の奨励および研究業績の表彰を目的に、日本消化器癌発生学会・学会賞(最優秀賞、奨励賞)を設定する。

### 2. 応募資格

- 1) 本学会会員であり、発表時45歳以下とする。(会費納入者とする)
- 2) 研究は原則として、国内で実施されたものとする。
- 3) 受賞歴のある会員からの再度の申請は認めないものとする。

### 3. 応募方法および締め切り

- 1) 学会賞に応募する場合、『学会賞応募希望』と明記し、下記を添付する。
  - ・発表内容のプロシーディング(A4で2枚以内)
  - ・筆頭演者の略歴(A4で1枚以内、生年月日を明記)
  - ・業績リスト(A4で3枚以内)
  - ・証明書(筆頭演者が確かに研究したという所属長の証明書)
- 2) プロシーディングは原則として学会総会開催の学会開催2カ月前までに以下宛てに郵送する。

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院消化管外科内

日本消化器癌発生学会「学会賞応募」係

- 3) 応募者は、総会期間中のプログラムにおいて発表する。

### 4. 選考委員会および選考方法

- 1) 選考委員会は、理事長、総会長、内科、外科、病理、基礎系の選考委員により構成され、総会長を選考委員会委員長とする。
- 2) 選考委員は、提出されたプロシーディングを検討するとともに、候補演題を可能な限り聴講し、総合的に評価する
- 3) 選考委員による候補演題の評価は、①研究内容の独創性、②発表の態度・方法、③討論を通しての研究者の理解度、の各項目について、それぞれ1～5の5段階(最も優れたものが5)により行う。
- 4) 委員長は、総会会期中に選考委員会を招集する。選考委員会は、評価された点数を基に協議し、最優秀賞1題、奨励賞2題を選考する。ただし、奨励賞に限り、選考が困難である場合は、若干の増減を可能とする。

### 5. 選考結果の公表と表彰

総会2日目の授与式にて、選考結果を公表し、賞状と副賞(最優秀賞：10万円、奨励賞：5万円)を授与する。

付則

- 1) 本規定は、平成19年7月11日より施行する。

## Oncologyについて

2005年から『Oncology』(Impact Factor：2.114)が本会の公式学会誌となりました。

### 1) 査読の流れについて

- ・会員から投稿された論文は編集委員会で選出した査読者(学会評議員)2名、associate editorがあたる。
- ・査読結果に伴い、著者が修正を行う。
- ・修正論文の採択を編集委員長の安井弥先生(広島大学病理学)が行う。
- ・最終採択をregional editorの樋野興夫先生(順天堂大学病理学)が行う。
- ・採用の場合、Editor in ChiefのDr. Markmanに送付する。

### 2) 会員の特典

- ・無料ページ数を越えると通常、追加料金となるが、著者一人当たり、年1回に限り無料。
- ・査読委員が学会の評議員である。

皆様のご投稿をお待ちしております。

Oncology(カルガー社)のホームページへは日本消化器癌発生学会のホームページ(<http://plaza.umin.ac.jp/~jsgc/>)からログインできます。(但し、会費納入者のみパスワード発行)Instruction等掲載されています。



## 平成18年度日本消化器癌発生学会理事会議事録

場 所：愛知県がんセンター国際医学交流センター B会場

日 時：2006年9月13日（水） 15：30～17：00

出席者：今井浩三、江角浩安、上西紀夫、小西文雄、立松正衛、  
平川弘聖、平田公一、前原喜彦、森正樹、安井弥  
（敬称略）

### 1) 理事長挨拶

上西理事長から挨拶があった。

### 2) 議事録署名人名指名

今井浩三理事、小西文雄理事に依頼し、了承を得た。

### 3) 議事録承認

前回の議事録が承認された。

### 4) 庶務報告

会員の動向が次のとおり報告された。

2005年9月30日の会員数は839名であったが、新入会29名、退会55名の増減があり、2006年9月12日現在の会員数は813名である。

### 5) 会則委員会報告

会則委員会からは審議すべき案件がないことが報告された。

### 6) 役員選考委員会

#### ①役員について次のとおり報告された。

貝原評議員、渡邊敦光評議員の定年にもない、特別会員として引き続き本学会を支援していただくことになった。引き続き評議員会、総会で承認を得て、決定される予定である。次期会長は平田理事、次次期会長は森理事であることが先の評議員会で承認された。第20回学会長に上西理事長が推薦され、上西理事長本人より保留の要請があった。

#### ②理事選考について次のとおり報告された。

来年度、寺野理事、北島監事の定年にもない、愛甲理事を新監事として推薦し、新理事は理事長が推薦し、理事長から本人に依頼することとなった。

#### ③評議員選考について次のとおり報告された。

新評議員として、油谷浩幸、牛島俊和、緒方裕、田久保海誉の4名を推薦した。引き続き評議員会、総会の承認を得て、決定される予定である。

今後、評議員の推薦および立候補を奨励することとなった。

### 7) 編集委員会報告

#### ①査読の流れについて次のとおり説明された。

会員から投稿された論文は編集委員会で選出した査読者2名、AEが査読を行い、査読結果に沿って修正を著者が行った後、安井編集委員長が採択を決定し、regional editorの樋野興夫先生（順天堂大学病理）の最終判断があった上でEditor in ChiefのProf.Trumpに送付する。

#### ②事務局に投稿のあった論文について次のとおり説明された。

昨年の総会で優秀演題として論文執筆を依頼した演題は19題、諾の返事が11題、その中で現在までに投稿のあった論文は7題である。事務局への一般投稿は2題である。

#### ③今後について討議の結果、次のとおり決定した。

一般投稿を増やすためには、「Oncology」が日本消化器癌発生学会のofficial journalであることを認知させる必要があるとの意見が出され、次回のニュースレターにinstructionを掲載することとなった。今年度の総会で優秀演題の選出を座長に依頼することとなった。

### 8) 国際委員会報告

#### ①第4回国際消化器癌発生会議について次のとおり説明された。

2006年8月24日～26日、MD Anderson Cancer CenterのProf.Levinが会長のもと、ハワイ、ホノルルのヒルトンハワイアンビレッジで開催された。一般演題の他、ポスター展示があり、全24演題のうち、19演題が日本からのものであった。全体の参加者数約100名、日本からは40名弱。国際的なactiveな会となった。

#### ②今後の国際消化器癌発生会議について次のとおり説明された。

第5回国際会議は2008年9月初旬、会長がSir Nick Wright (Hammersmith Hospital Imperial College school of Medicine) がOxfordで、第6回会議は2010年に会長Prof.Laymond Duboisがアメリカ西海岸で開催の予定である。今回の反省点として、参加者が見込みより少なかったことが挙げられ、今後は広報を広い範囲で早めに行うこととした。

#### ③国際消化器癌発生学会の会費について説明があり、審議の結果、次のとおり決定した。

国際消化器癌発生学会会費の納入率が悪く、支払いがあったのは日本人23名のみであった。納入率を上げるため、会員のメリット、会費収入の使途を明確にし、納入方法を現金振込のみから海外の会員も容易に支払いのできるカード決済も可能とすることとなった。

#### ④追加事項として次のことが報告された。

第4回国際消化器癌発生会議に日本消化器癌発生学会より50万円、中外製薬より100万円の寄付があった。

### 9) G-Project委員会報告

今後の活動方針が次のとおり報告された。

予後因子としてのG-Projectをレビューした。いくつかの臓器に絞り、p53、VEGFに加えていくつかのファクターで客観的にブラインドで多施設で検討することになった。方法論、評価の仕方、個人情報の問題など決定事項は残っているが、今後、早目に多くの成果を報告する予定である。

### 10) 在り方委員会報告

学会賞を設ける案が理事長から出され、次回（翌日開催）の在り方委員会にて検討する旨、報告された。

### 11) 倫理問題検討委員会報告

江角理事からG-Projectが施行される場合、倫理問題が生じる可能性があるとの指摘があり、今後の検討課題となった。

### 12) 財務委員会報告

平成17年度収支決算書が承認された。平成18年度収支予算書（案）が承認された。

### 13) 第16回学会総会（2005年）報告

第16回日本消化器癌発生学会総会は平成17年10月13日から14日にかけてかごしま県民交流センターで開催され、演題118、参加人数176名であったことが報告された。

### 14) 第17回学会総会（2006年）報告

第17回日本消化器癌発生学会総会は平成18年9月14日から15日にかけて愛知県がんセンター国際医学交流センターに於て開催されることが報告された。

### 15) 第18回学会総会（2007年）報告

第18回日本消化器癌発生学会総会は平成19年11月8日から9日にかけて北海道厚生会館ウェルシティ札幌にて開催される予定であることが報告された。

### 16) 第19回学会総会（2008年）について

前回理事会において第19回学会会長として選出された会長代理から第19回日本消化器癌発生学会総会は8月28日から29日にかけて、大分県別府市にて開催される予定であることが報告された。

## 役員名簿

理事長 上西 紀夫

理事 (18名)

愛甲 孝	井藤 久雄	今井 浩三
江角 治安	岡 正朗	上西 紀夫
久保田哲朗	小西 文雄	菅野健太郎
田尻 孝	立松 正衛	寺野 彰
平川 弘聖	平田 公一	前原 喜彦
森 正樹	門田 守人	安井 弥

会長 平田 公一

次期会長 森 正樹

監事 (2名)

小俣 政男 北島 政樹

事務局幹事 (2名)

清水 伸幸 野村 幸世

## 名誉会員・特別会員名簿

名誉会員 (14名)

大原 毅 (名誉理事長)		
杉町 圭藏 (名誉理事長)		
青木 照明	内田 雄三	小川 道雄
金澤曉太郎	佐治 重豊	杉村 隆
曾和 融生	田原 榮一	長予 健夫
二川 俊二	磨伊 正義	三輪 晃一
恩田 昌彦 (故)	下山 孝 (故)	
長町 幸雄 (故)		

特別会員 (23名)

朝倉 均	磯野 可一	岩永 剛
岡島 邦雄	冲永 功太	貝原 信明
笠原 正男	木村 健	小西 陽一
斉藤 利彦	曾我 淳	高橋 俊雄
船曳 孝彦	比企 能樹	廣田 映五
平山 廉三	福富 久之	藤田 力也
武藤徹一郎	武藤 泰敏	安富 正幸
山川 達郎	渡邊 敦光	
馬場 正三 (故)		



## 評議員名簿

(106名)

愛甲 孝	川又 均	炭山 嘉伸	西山 正彦	安井 弥
浅尾 高行	北島 政樹	高橋 豊	野口 剛	八十島孝博
浅原 利正	北台 靖彦	田久保海誉	野村 幸世	山口 明夫
油谷 浩幸	國安 弘基	竹之下誠一	秦 史壮	山本 博幸
伊藤喜久治	久保 正二	田尻 孝	服部 隆則	横崎 宏
井藤 久雄	久保田哲朗	竜田 正晴	馬場 秀夫	吉田 和弘
伊東 文生	熊谷 一秀	立松 正衛	平川 弘聖	
今井 浩三	倉本 秋	田中 紀章	平田 公一	(50音順)
牛島 俊和	桑野 博行	田渕 崇文	藤井 茂彦	
内田 英二	高後 裕	塚本 徹哉	藤村 隆	
宇都宮 徹	小西 文雄	辻谷 俊一	藤盛 孝博	
江上 寛	今野 弘之	寺野 彰	前原 喜彦	
江角 浩安	澤田 鉄二	藤 也寸志	松川 正明	
太田 哲生	塩崎 均	徳永 昭	松倉 則夫	
大平 雅一	汐田 剛史	富田 尚裕	松原 長秀	
岡 正朗	島田 信也	豊田 実	真船 健一	
緒方 裕	嶋田 紘	内藤 善哉	三木 一正	
落合 淳志	島田 光生	永井 秀雄	三森 功士	
小俣 政男	嶋田 裕	中島 孝	源 利成	
掛地 吉弘	嶋本 文雄	仲田 文造	峯 徹哉	
加藤 俊二	清水 伸幸	中森 正二	宮崎 耕治	
加藤 広行	下山 省二	名川 弘一	宮地 和人	
兼松 隆之	白水 和雄	夏越 祥次	棟方 昭博	
上西 紀夫	菅野健太郎	西野 輔翼	森 正樹	
川口 実	砂川 正勝	西森 英史	門田 守人	

## フッ化ピリミジンの新分類

# D I F

*DPD Inhibitory Fluoropyrimidines*

**UFT, TS-1はDIFです。**



抗悪性腫瘍剤(代謝拮抗剤)

**UFT** ユーエフティ<sup>®</sup> カプセル100mg  
 ユーエフティ<sup>®</sup> E顆粒

劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品 テガフル・ウラシル配合カプセル剤  
 薬価基準収載 テガフル(腸溶)・ウラシル配合顆粒剤

抗悪性腫瘍剤(代謝拮抗剤)

**TS-1** ティーエスワン<sup>®</sup> カプセル20  
 ティーエスワン<sup>®</sup> カプセル25

劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品 テガフル・ギメラシル・  
 薬価基準収載 オテラシルカリウム配合カプセル剤

ユーエフティ、ティーエスワンの効能・効果、  
 用法・用量、禁忌を含む使用上の注意につき  
 ましては製品添付文書をご参照下さい。

製造販売元  
 資料請求先  
 (医薬品情報室)



大鵬薬品工業株式会社  
 〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27  
 TEL.0120-20-4527  
<http://www.taiho.co.jp/>

## 編集後記

今年の夏は、地震・記録的な猛暑・台風と、自然の力の強さを感じさせられる日々が続きました。被災地の皆様のご苦労と救援活動等に参加された先生方の人道的行動には心よりお疲れ様でしたと申し上げたいと思います。本当に自然の前に人間は無力だと痛感させられる毎日でした。そうは言っても、現実には我々の目の前には病気で苦しんでいる多くの患者さんがいらっしゃいます。自分が自然の前に非力と知りつつも、少しでも何とかしてあげたい、この病気の治療に役立つことを見つけないと考える気持ちが、我々医師の医療・医学研究に対するモチベーションになっているのではないのでしょうか。

先日、奈良県で妊婦さんの搬送が手遅れになったという事件が報道されましたが、当直をしている医師の一人として他人事とは思えない危機感を感じました。また、ある学会でヒューマンエラーについての特別講演を拝聴する機会がありましたが、人の命を預かる、ミスの許されない分野であるはずの我々医療業界の安全対策が建設工事現場以下との説明を聞き、とても恐ろしくなりました。一人ひとりができることは限界がありますし、ミスをしない人間はいません。一人の医療従事者のミスが、患者さんに悪影響を及ぼす大事に到らぬようなシステム作りこそが重要なのだということが良くわかりました。

本学会名誉理事長の大原毅先生が書かれた『この国の医療のかたち』を拝読いたしました。日本の医療について主に医療側から実にみごとに書かれています。この本は一人でも多くの『一般国民』に読んで頂きたいと心から思いました。非力ではあっても病気に立ち向かいたいと思う我々医療従事者の臨床・研究の場でのモチベーションを保ち、その気持ちが空回りにならないようにするためには、国民全体の医療・医学に対する意識を変えていかなければならないように思います。これから我々はどのように国民にアピールすべきなのか、皆さんも一緒に考えてみて頂ければ幸いです。

学会事務局幹事 清水 伸幸

発行 日本消化器癌発生学会事務局  
〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学医学部附属病院消化管外科・乳腺内分泌外科内  
TEL 03-3815-5411 (内線 35141) FAX 03-5800-9731  
発行者 日本消化器癌発生学会  
編集 総務委員会  
印刷 福々印刷株式会社



指定医薬品・処方せん医薬品\*  
プロトンポンプ阻害剤

【薬機部承認】  
**パリエット®**錠10mg  
錠20mg  
〈ラベプラゾールナトリウム製剤〉  
\*注冊一医師等の処方せんにより使用する

●効能・効果、用法・用量及び禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

製造販売元  
エーザイ株式会社  
〒112-8608 東京都文京区小塚4-6-10  
<http://www.eizai.co.jp>

商品情報お問い合わせ: エーザイ株式会社 お客様サポートライン  
☎0120-419-487 9-18時(土、日、祝日 9-17時)

PT0702-11 2007年2月作成